第５３起動歩兵部隊ものがたり

カルダモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第５３起動歩兵部隊ものがたり

【Ｎコード】
Ｎ８９９５Ｕ

【作者名】
カルダモン

【あらすじ】
物語の舞台は西暦２７０１年。あのＰＣエンジンのゲーム、ネクタリス。
好きな女の子を守るため、ナカヂマは連合軍に入隊した。しかし、彼女は空軍に、ナカヂマは陸軍に配属になってしまう。
運動音痴、虚弱体質、入隊動機不順、使命感ゼロ・・・兵士としての最低条件をすべて持ち合わせていないこの男が放り込まれたのは、総員２名のゴミ部隊だった・・・。

ナカヂマは入隊する！の巻

僕が国連軍に志願したのは、好きな女の子が志願したからだ。彼女は僕が守る。そう思っていた。でも、入ってみると適性検査で僕は陸軍、彼女は空軍に振り分けられた。

「これより山岳地帯での戦闘訓練を行う。各自、スーツの酸素残量を確認しておけ！」

教官が怒鳴る。ヤバい、貧血起こしそう…。教官の話は異常に長いし、月面活動用防護スーツの中は臭いし、陸軍ってのは本当に最悪だ。

「このセネカでの訓練を終えれば、貴様らは晴れて国連軍陸戦部隊に編入というわけだ。腰抜けは帰っていいぞ！」

嘘つけ。帰りたいって言ったら殺される…。入ったら最後なんだよな。

西暦２７０１年。ガイチ帝国は月資源を巡って国連側と対立。翌年、宣戦布告した。当初、軍事力の差は誰の目にも明らかだったが、事態は意外な展開を見せた。結果的には、ガイチの背後には複数の国の援助があったと考えるのが妥当だろう。ガイチの力は圧倒的だった。国連軍は兵器の性能においてはるかに劣っていた。既存の採掘施設の大半がガイチにより占拠された。そして、ガイチの最終衛星兵器であるＭＯＡが月面最大の基地ネクタリスで密かに建設中だと言う…。

「いや、勝てないだろ。」

「おい、貴様！」

教官が怒鳴る。僕に。ヤバい、声出てた！教官はゆっくりと威圧的に僕に歩み寄った。

「すいません、今のは冗談すよ。」

教官の太い腕が恐ろしい速さで突き出された。

目が覚めると僕は病室にいた。殴られてからの記憶がない。訓練をサボった自分は部隊を追放されるのか？上官に聞くと、信じられない事に、僕は国連軍第５３機動歩兵部隊に編入されていた。

「ここか…」

今思えばこの時ほど死にたいと思った事はない。数日後、５３部隊のロッカールームに初めて入った瞬間、目を疑った。僕がたくさんいる。僕のようにひ弱で冴えない顔をした奴らが。

「ナカヂマ君だね。」

手前の男が言った。くしゃくしゃの髪にデカいメガネ。彼はガリガリの腕を差し出した。握手の瞬間、彼の油粘土のような体臭が鼻についた。

「私はユカワ。油川だよ。」

そう言って笑う彼の顔は腹が立つほど醜かった。

「ワシはイシヅじゃ。」

小柄な青年が低めの声で言った。握手の瞬間、彼からは何故か豆乳の匂いがした。

「…。」

「…。」

「これだけ…？」

信じられない事だが、部隊はたったの３人だった。５３部隊は利用価値のない兵を集めたエリートゴミ部隊らしかった。

最初の任務はいきなり厳しかった。磁気嵐の吹くエリア《リボルト》にて敵の採掘施設を占領する。参加部隊は第０８中級戦車小隊、第１５機動歩兵部隊、そして第５３機動歩兵部隊だった。

「私たちは捨て駒だね。」

ユカワが言った。

「なんで？」

「中級戦車小隊ってのはつまり、平均的な性能の戦車のパイソンが４機の部隊だ。」
「僕らはそのサポートだろ？あと、施設占拠の時の白兵戦は歩兵がいないとできないじゃん。」
「バカじゃの。それは１５番さんの仕事じゃよ。」
イシヅがため息。
「第１５部隊？でも、もしもの時のためとか…」
「よいか、１５番はエリート集団じゃ。装備だって違う。携行型ミサイルが通常装備じゃ。」
「そんな重いもん、いらねえし。ライフルで十分。」
「１５番がいるのにワシらが呼ばれる理由は一つじゃ。」
「１５番さんの被害を減らす事だよ。要するに捨て駒さ。」
僕は泣いた。
「泣くな、少年よ。」
「そうとも。結果はまだわからないよ。」
「あんたら嫌じゃないのか？この扱い、この屈辱！」
僕は叫んだ。もう耐えられない。こんな糞どもと一緒に死にたくない。僕は、まだ…。
「嫌に決まっているだろうが。お前には誇りさえ無いのか。」
ユカワがいつになく鋭い口調で言った。驚いて顔を見ると、口調だけでなく、表情も勇ましくなっている。ちなみに、何故か髪も逆立っている。
「ガキが…」
イシヅが呟く。彼の顔付きもまた戦士の様で、髪はトグロを巻いている。
「じゃあ何を…」
「私たちは過去４４回の作戦において捨て駒として参加、全て無傷で生還している。」
「戦車が全滅しようが戦闘機が全滅しようが、丸腰のワシらは無傷じゃった。」

「あんたら…本当は何者なんだ！」
僕の言葉に２人は不気味な笑みを浮かべる。そして、表情が徐々に和らいだ。
「着いて来なさい。私たちの秘密を教えてあげよう。」
「お前はもうワシらの仲間。秘密は守れよ。」
そして彼らは、本隊から離れた丘陵地帯に僕を連れていった。

ユカワは立ち止まり、バックパックから小さな機械を取り出した。スイッチを押すと、足下の地面が沈下した。
「なんだ！」
「騒ぐな。別に問題なしじゃよ。」
地下には広いスペースが広がっていた。兵器を格納するガレージのようだ。
「さあ、ナカヂマ君。これが私たちの秘密だ。」
ユカワが指差す方向をみた。
「これは、まさか…！？」
ガレージの中央には漆黒の巨人が立っていた。ガレージの照明が点いた。光に照らされたその機体は、全身が光り輝く銀色だった。ヒトの形をした２５メートルはあろうかという巨大兵器。それはまさに神のような神々しさだった。
「背には４つのジェットブースター、両肩には追尾型ミサイル、左腕は高速チェーンガン、全身は光学迷彩、頭部には広範囲レーダー、脚部は大型逆関節、そして右手には長距離プラズマ砲。」
ユカワが歌うように言った。
「ワシらの翼、ギガルニウスじゃよ。」

アリサちゃん

「すげぇ…これならこいつだけで勝てる！」僕は歓喜した。
「イシヅ君、アレを持ってきてくれないか。」アレって何！？もしかしてパイロットスーツとか！？
「ユカワさん、あんたの事見直したよ！」
「大袈裟だよ…私は私たちにできる事をしたかっただけだよ。」
「いいや、あんたは英雄だ。僕はあんたについて行くよ！」
「そうかい。それは嬉しいが、少しプレッシャーだなぁ。」
「自信持ちなよ。さあ行こう！ガイチのヤツらを灰にしてやろうぜ！」僕は拳を天に突き上げた。「え：ヤダよ。」予想外の言葉だった。
「この機体で戦った事が無いだって！？」
「当たり前じゃないか。」
「な、何で：！？」
「マイトレーヤは装備してる武器が重すぎて動かないんだよ。」
「！！！」
「ほれ、持ってきたぞ。」見るとイシヅが豆乳１ダースを抱えてやってきた。
「お、ありがとう。」ユカワとイシヅは豆乳を地面におき、くつろぎ始めた。
「何してんだ…！？」
「任務の時はいつもこうしてここで豆乳を飲むのじゃよ。マイトレーヤを眺めながらな。」
「さ、ナカヂマ君も一緒にどうだい？」だんだんと状況が飲み込めてきた。要するに、こいつらは作戦中ずっとここに身を潜めていた。来る日も来る日も。たとえ、味方が全滅しようとも。だから生き延びた。何もおかしな事はない。
「どうかしたかい？」

「お前ら…。」
「豆乳飲みたいんじゃろ？好きなだけ飲め。腐るほどあるんじゃから。」
「……腐っ……！」
「なんじゃ？」
「お前ら腐ってやがる！」

数時間後。
「終わった…」
「終わった…」
「こっちも終わった！」マイトレーヤの装備を軽くし、活動可能にしたのだ。
「おい、何が残った？」
「武器は無いが、光学迷彩と…レーダーだけじゃな。」
「な、何！？」
「脚部は装甲を外したし、まさに丸腰だね。」
「装甲外すな！コード類丸見えじゃないか！拳銃一発でオシャカだぞ！」
「動かせと言ったのはお前じゃろうが！」
「まーまー。光学迷彩だけでも何とかなるさ。透明なんだよ？」
「そうじゃな。戦車や歩兵は踏み潰せばいい。」
「戦場なめてんだろ！戦闘機の時はどうするつもりだったんだ？」
「その辺の岩でも拾って投げればよかろう。」
「当たるか！」
「本当に出撃するの？てか、コクピット狭ッ！」
「寄るな油粘土。」
「豆乳くらえ★」

「冷たっ！イシヅてめえ豆乳吐くな、殺すぞ！」仕方がない。こうなったら出撃するしかない。また上官に殴られるのは嫌だ。

「隊長、先ほどからゴミ隊の信号が消えています。」
「これだけの磁気嵐だからな。電波障害って事も考えられるが、ヤツらは戦線離脱のプロという噂もある。」
「隊長、なんか地響きしませんか？」
「ああ、するな。敵かもしれん。レーダーは？」
「磁気嵐の影響で壊れ」
「どうした？ぐああ！！」

「今の揺れは何だ？」
「何か踏んだのかもね。嵐で前がよく見えないなぁ。」
「あ！」
「どうした、イシヅ。」
「今のは１５番さんじゃ。」
「は？」
「あんた、いま１５番さん踏んだぞ。潰れたスーツが見える。こりゃ軍法会議もんじゃな。」
「殺人鬼♪はい♪殺人鬼♪」ユカワが殺人鬼コールを始める。
「黙れ！くッ…上等だ、お前らも共犯者だからな。」
「ふざけんな！」
「最低じゃ！」
「レーダーに反応だ！」
「敵？」
「ヤバいぞ…」
「どうしたイシヅ？」
「この陣形、まさか…ハンター！」

「ハンター？」
「目撃例は少ないんだけど、対地・対空最強の火力を誇るガイチ軍の主力戦闘機って噂の機体だよ。都市伝説に過ぎないけどね。」
「近くにパイソン４機の残骸がある。あのエリート集団を倒せるのはハンターくらいじゃよ。」
「うそ！０８が全滅！？」
「怖いねえ…」
「撤退じゃな」コクピット内に“だよね～”感が漂った。しかし…
突然、物凄い衝撃がマイトレーヤを襲った。続いて、視界が弾幕に覆われる。
「おい、どうなってんだこれは！」
「ま、まさか…」イシヅが息を飲む。ユカワは念仏を唱えている。
弾幕が晴れると、嵐の隙間から敵機が姿を現した。
「キター！！！！！」ガイチカラーのグリーンに染まったスマートなボディ。対空ミサイル、対地爆弾が装備された巨大な機体はまさに狩人。
「間違いない。あれがハンターじゃ…」
「南無阿弥陀仏…」
「ハンターだろうが何だろうが関係ない。俺たちはここで死ぬんだ。」
「ヤツらに光学迷彩は効かんのか！？」
「南無阿弥陀仏…」
「わからん。第１射は当たらなかったが、狙いはガチだ。」
「南無阿弥陀仏…」
「ああ！もう念仏うざい！」ユカワに目潰し。
「きゃ！！」
「こうなったら奥の手じゃな…ナカヂマ、ＡＴフィールド展開じゃ！」
「できるかァァ！！」
「目標の識別信号ー青、使徒です！」

「のるな馬鹿！お前は黙ってろ！」
「第２射来ます！」またも衝撃に襲われるマイトレーヤ。しかし、今度は
「脚部破損。機体が保ちません！」完全にどこかのロボットアニメの台詞をパクるユカワ。
「機体温度も上がっておる…。このままでは熱暴走じゃ！」
「熱暴走って何だよ！知らねえ言葉適当に使うんじゃねえよ！」僕は焦ってコクピット内のあらゆる装置をいじくった。
ぽちッ★
《緊急モード、移行を確認。システム、異常無し。誤差修正…》
「ナカヂマ、お前いったい何を押した！！」
「知らん。僕はただ、この黒と黄色のガラス箱の中の赤いスイッチ押しただけだ！」
「それ、自爆スイッチじゃないの！？」ユカワが泣き叫ぶ。
「なにしてくれとんじゃァァ！！！」
「ワザとじゃねえって！」
《修正完了。これより、合体プログラムを起動します。合体する機体をロックオンして下さい。》
「合体だとォォ！！」
「冗談じゃないよ！」
「阿呆じゃ！」
《ロックオンして下さい》
「できるわけねえだろ！味方機体なんてそもそもいねえっつーの！」
「あれ？」ユカワが呟く。
「ハンターでよくね？」

「お前ら馬鹿か！？」僕の叫びを無視してユカワとイシヅはなんとかハンターをロックオンした。
《ロックオンを確認。直ちに合体します。パイロットはスーツを固

定して下さい。》
「止めろ！馬鹿！僕はまだ死にたくない！」
「出撃したいと言ったのは貴様じゃろうが！」
「皆の衆、合体の時間だ。」ユカワが意味もなく低音域で呟く。
「気分でキャラ変えんの止めてくれない？すげぇ腹立つんだけど！」
「つべこべ言わずに体を固定するんじゃ！潰されるぞ！」僕たちはコクピット内で互いの体を支え合った。油粘土と豆乳の匂いが混ざって、バッタの体液の匂いがした。

《機体がハッキングを受けています。戦闘モード解除。直ちに合体モードに移行します。》
「何よこれ？」ハンターのコクピット内、パイロットのアリサは狼狽した。
「合体？できるわけないじゃん。」しかし、機体は敵機に吸い寄せられていく。
「なんでコントロールが効かないの！？」やがて機体が変形を始めた。翼が後方にスライドすると、コクピットは１８０度回転し、さらにエンジンが２つに割れた。
「どうなってんのよ！？」すると、機体は強い衝撃と共に敵機と合体した。変形はまだ終わらない。翼が８分割され、天使っぽくなった。かと思うと、対空ミサイルや対地爆弾がイイ感じになり、コクピットは上下逆の状態になって止まった。
「すげぇ。ガチで合体した。」信じられない。まさか初対面の敵の主力戦闘機と合体するとは。
「ワシらの勝ちじゃ。」イシヅがニヤリと笑う。
「敵の顔見ようよ。」そう言ってユカワがスイッチを押す。画面が切り替わると、目が覚めるような美少女が映し出された。青い眼、白い髪。どうやら彼女がハンターのパイロットらしい。
「か、かわええ…」ユカワが鼻の下を伸ばしまくっている。

「可憐だ。青眼の白少女と言ったところか。」
「なにそれ、どっかのデュエリストのデッキに入ってそうなんだけど。あれ…？」僕たちはしばらく見入っていた。しかし、僕の脳裏に少し不安がよぎった。
「あ、あのさ、さっきから声聞こえてるんだけど…。」青眼の白少女が気まずそうに言った。
「そ、その声は！！」僕は叫んでいた。間違いない。この少女は…この少女は！！
「は？あんた誰よ。」彼女こそ、僕が軍に入隊した理由であった。非餓死中学校３－Ａ出身、
「アリサ・サルモネラ！」
「え：なにそれ、細菌？」イシヅとユカワがハモった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8995u/

第５３起動歩兵部隊ものがたり

2011年7月21日03時41分発行